訓蒙修身書

田村初太郎校閲
福田宇中編纂

五

乙72
388

大日本教育會書籍館
一八函
一架
三號
一二册

K110
184
5

明治十五年四月開雕

訓蒙修身書

積善館藏梓

東京圖書館藏

訓蒙修身書第五

緒言

本編ハ學問言語忍耐慈善ノ四章ニ分ツ九モ言語ノ部ハ第二卷ニ揭出スト雖ヒ彼固ヨリ卑近ノ習誦ニ易キモノナリ今載スルモノハ稍密ナルモノニシテ漸次高遠ノ域ニ至ラシメント欲ス讀者其要領ヲ解シ其德性ヲ涵養スベシ是初等科第三年前期生徒ノ用ニ

供スルモノナリ

明治十四年十二月　編者識

學問　言語　行狀　禮儀　器用　賴志　能久厚

訓蒙修身書第五

田村初太郎校閲
林　和太郎訂正
福田守　中編纂

第一章　學問

○學問とは、言語行狀藝術、及び禮儀等を、勤め習ふをいふ、

○學問をなすに、生れつきの器用なるは、賴むに足らず、志を厚くし、能久しき

堪道得功

に堪へ、道をさとり得て、功をなすものなり、

○男子志なきは、鈍銕の鋼なきが如し、傳家寶

事竟

○志あるものは、事竟になるべし、光武

玉琢

○玉琢かざれば器をなさず、人學びざれば、道をあらず、禮記

道死

○朝に道を聞て、夕に死するとも、可なり、孔子

志立功耻要

○志を立つる功は、耻を知るを以て、要とす、西諺

貴

○今日の一時は、明日の二時より貴し、西諺

良田萬頃一藝

○良田萬頃あるも、一藝の身にあるに如かず、同上

耻勇

○學を好むは、智にちかし、力め行ふは、仁に近し、耻を知るは、勇にちかし、古語

○學問は、一時に勤めたりとも、成就せ

懈　意味解　惰氣　強　解得樂　敏鈍　畢竟

るものにあらぜ、日を積み、月を重ね、懈たらぜ、學ぶときは、必其功を見るべし、

○學問は初の程は、よく其意味を解し、かぬることなどありて、惰氣を生ぜることあれども、強めて學ぶうちに、自ら其意味を、解し得て、其心を樂ましむるに至るべし

○小兒は、其性に因り、少しの敏鈍ある如く、見ゆるも、事を為せと否とは、畢竟

厚薄　油斷　進歩　厚　勉強　生涯　榮枯　萠　幼稚　遊戯　耽貪　賤陷

其志の厚きと、薄きによるものなり、

○志薄くして、油斷せる小兒は、性敏なるも、進歩せること能はぜ、志厚くして、勉強せる小兒は、性鈍なるも、必進歩せるものなり、

○人の生涯榮枯の、由りて萠せ所は、幼稚のときに、學問せるとぜざるにあり、

○幼稚の時には、只遊戯のみに耽りて、學問せざる人は、他日多くば、貪賤に陷

憂苦　屈勉強勇氣　漂景偶然畫工寫色起寢食

り、憂苦を極むべし、

○たとひ學びがたき事ありとも、これに屈せることなかれ、必學び得らるゝまで、勉強せべし、之を勇氣といふ、

○亞米利加のジョンバーナルドといふ少年あり、一日ミスシッピー河の中流に漂ひ、其景色の美なるを見て、偶然に畫工となりて、山水を寫さんことをおもひ、起せしより、寢食を忘るゝに至

忘家貧　糊口　賣藥鋪　傭　白堊　觸怒　種々業　屢患難　遇屈　購過　經過　粉本成就

れり、然るに、家貧にして、糊口の道を得ぜ、或る賣藥鋪に、傭はれしが、常に白堊をもつて、目に觸るゝ物を畫けり、主人これを怒りて、遂にその家を逐はれ、又糊口の道を失へり、それより種々の業をなせども、果せこと能はぜ、屢患難に遇へども、屈せぜ、後多少の金錢を得て、小舟を購ひ、山水の間を經過せること、數百餘日にして、全く粉本成就し、遂に

帆布　景色　意匠　製　勉強　忍耐　著述　稱　國史　身體　疲勞　扶　志氣　剛毅

帆布三里の平面に、三千里内の景色を寫し出せり、一少年の意匠より、かゝる大畫を製せしは、勉強忍耐の功といふべし、

○佛蘭西のタールリーといふ人は、著述を以て稱せらる、國史を作るに苦しみ、兩目明を失ひ、身體疲勞し、一室内と雖も、人の扶けを得ざれば、歩むこと能はず、然れども、志氣の剛毅なること、健

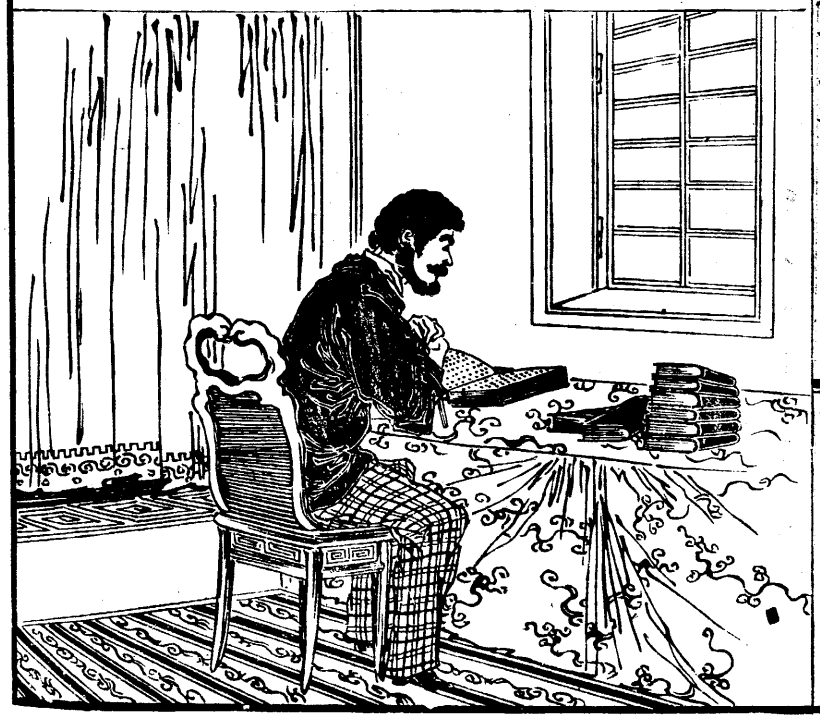
健全　利益　貨殖　將帥　臨　報　藝文　委　禍災　懦弱　蕩然　歸着　恩眷　倚　怨　咎

全の人に百倍せり、嘗て曰く、學問著述の、國家に於る、其利益の大なる、貨を殖して、國を富もの比にあらず、將帥の戰に臨み、死を致して、國家に報ずるも、吾の身を藝文に委ぬるも、猶此の如し、假令大禍災に遇ふとも、此志を失はず、夫れ懦弱の人は、其心蕩然として、歸着する所なく、人の恩眷に倚らんと欲し、得ざれば則ち天を怨み、人を咎む、是天人

職業

志操廢

の過にあらぎ、自立せざるの罪なり、人能く心を職業に用ゆれば、患難に遇ふとも、何ぞ志操を廢することをなさんや、吾今兩目物



羅累　聊

禍言飲節　病語食

譏　過妄

を見ぎ、身は病に羅るといへども、聊以て吾心を累ぎに至らぎといへり、

第二章　言語

○禍は口より出で、病は口より入る、故に君子は、言語を謹んで、飲食を節にぎ、

要覧

○人を譏れば、人亦吾を譏る、人をそしるは、即ち自ら譏るなり、

○人の過は、吾心にこれを知るも、妄り

得失終身

に、口に出さべからず、大和俗訓

○一言の得失より、終身の幸不幸を生ずるもの多し、故に言語は、謹まざるべからず、智氏家訓

疾擇

○食を節にすれば、疾なし、言を擇べば、禍なし、禍の生るは、天より下るにあらず、多く其口よりす、

熊度面色忽文雅容體

○熊度面色言語は、真に忽せにすべからず、文雅にして、たのしき、容體をなし、

清聲傾聽不憖

清らかなる、聲をもつて語れば、他人傾聽すべきも、不快の色、不憖の態をもつて語れば、人をして嫌惡を起さしめん、

嫌惡善揚隱長短

○君子は、人の善を揚げて、人の惡を隱し、人の長ずる所を取り、短き所をいはず、

誚輕薄

○口を開きて、人を誚るは、第一の輕薄なり、唯德を失ふのみならず、又吾身を失ふ、傳家寶

郷里　長短　論鄙　無益　用法　朋友　長短　背後　稱　訕　傷　矛戟

○郷里人物の、長短を論じ、鄙俚無益の談を、なすこと勿れ、　五種遺規

○言語の用法、優美なるは、其人文雅にして、其朋友の善なるを、あらはす、

○前人の長短を、説くこと勿れ、自家の背後に眼あり、　古諺

○人の惡を、稱するものを惡み、下流に居て、上を訕るものを惡む、　孔子

○人を傷めるの言は、矛戟よりも甚し、

筆紙　形　虛言　責　喜　高笑　愚　習　儀　賊　夫　集　屢　最　見　苦

況や筆紙に形をや、　荀子

○世に虛言多し、虛言を信じて、人に語れば、吾も亦、虛言の責を免れず、　大和俗訓

○喜ぶときの言は、多く信を失ひ、怒る時の言は、多く體を失ふ、

○常に高笑をなすは、愚にして習儀なきものなり、彼の賊夫の集るや、必無用のことを談じ、屢高笑して、快と稱するは、最と見苦し、

陋態　卑賤　喧囂　容貌　野卑　禍福　招　樞機　慮深

○高笑をなすは、最も陋態なり、真の才智の人は、人を笑はず、人をして笑を發せしめず、

○高笑は、其卑賤無禮なるものにして、其卑賤無禮なるは、喧囂なるが為ならずして、其容貌の野卑なるなり、

○口は即ち、其禍福を招くの、樞機なれば、一言一語も、決してこれを、忽かせにすべからず、故に智足り、慮深き人は、他

體察　發　談話　際　奇　態　不　行　儀　善　良　平　常　親　友　痴　漢　言　葉　正　良　朋　友　誦　讀

人の情を、體察して、後ち言を發す、

○談話するの際、奇態して、志きりに笑ふものあり、これ不行儀より、おこるものなり、たとひ生れつき、善良の人にても、平常の話にも、猥りに笑を帶るときは、其親友にあらざる者は、一見して痴漢となすべし、

○言葉遣ひの、正良ならんことを、欲せば、朋友に請ふて、己れが誦讀を聽の

音聲抑揚句讀善惡高低

め、音聲の抑揚、句讀の善惡を、改正せしむべし、

○言葉の遣ひ方、聲の高低は、實に忽にすべからず、

談話察

○平生の談話によりて、察すれば、その

驕誇概注意

驕誇するところを知るに難からず、人概してその得意を談ずるを、好むものなり、故にその談話に注意して、驕誇の

親善

本を知り得バ、其人の親善を得るに至

至易席適列坐展眸

つて易からん、

○一席に適する話も、他席に適せざるあり、故に列坐を展眸して、言を發すべし、

詼謔區別

○詼謔を座席の區別なく、話するものは、

履歷

目なき人といふべし、

○人も問はざるに、吾父子兄弟の身の上、己れが履歷等を、語るべからず、

○人と語らば、常に其面を見よ、人と語

俯首過失疑　顔色驕傲倦怠態　怒言辭含詳語氣侵温態度群集精神感愛

つて俯首するものは、身に過失あるかと、疑がはるべし、

○人と語りて、顔色ゐぶり、又驕傲倦怠の態あるものは、人をして不快ならしむ、

○怒りを含みて言ひ、言辭詳ならず、又語氣人を侵すものは、人の温りを起す、

○談話におひて、態度の正しきは、群集の精神をなぐさめて、自らこれを感愛

思想　自己動膝窮咳唾　才能珍談奇説主張賤

せしめ、己ず思想をして、のこるくまなく、人の心にみたしむることを得べし、

○自己の思ひをのぶるに當り、猥りに手を動かし、膝をさり、語の窮するときは、咳唾などするは、甚だ見苦しきものなり、

○己が才能を、人にうらんとして、珍談奇説を、主張するものは、甚だ賤しきものなり、

沈默　測疑惑

○談話は、人の心をあらはすものなれば、かろ〳〵しくすべからず、

○沈默にして、測るべからざるものは、人と親みがたく、且人の疑惑を起さしむ、

長談

○我に向ふて、長談をするもの、あるときは、つとめて之をきくべし、其内あるひは、取るへきこともあらん、取るべきことなきも、その人は必滿足せん、

滿足

辭巧　辯著

○辭巧みなるも、惡をかくすことを得ぜ、辯を好めば、その惡いよ〳〵著しく、其善をして、終に光りを失なはしむ、みづから、功德を誇れば、その言たくみなるも、人これを惡みて、その名譽を損をべし、

功德　誇名譽　損

奴僕　罪

○奴僕の身に、罪あるも、惡言をいだして、之を賤しむべからず、

英國　門地

○英國の才ノリアスといふ人は、門地

家産　性質　鋭敏　嚴師　智識　一點　汚行　疎行　愛慕　偏固　見識　位地　事情　言行　變化　恥辱　差別

も高く、家産もゆたかに、性質鋭敏にして、加ふるに、嚴師の教育をもつて、其智識の廣大、その行ひの正しき、一點の汚行なき、好人物なり、然るに、世と疎にして、人の愛慕を得ることなし、その故は、偏固の見識を立て、いひけるは、位地をはゝり、事情を察して、己が言行上に變化を起さゞものは、高士たるもの、恥辱なりとて、位地事情等の差別なく、己ゞ

尊卑　關　真理　辭　大聲　罵黙　褒貶　慮　暴　侵　婚姻　招

思ふ所はこれを言ひ、己が非とする所はこれを難じ、尊卑男女等の人品に關せず、直情を以て、人に接し、少しにても、真理に外ゝ、辭の、耳に入るあれば、則ち大聲して、直ちに之を罵り、以て道に合ふものとなし、黙して心の中に、褒貶をすること能はず、是故に、その言語も、慮暴にして、人意を侵すこと少なからざりしが、或日オリノアス婚姻の席に、招

待新夫婦詐偽信一段演説原来不品行疑被講説高僧賣買罪科僧徒　爭論

待されたるに、新夫婦に對して、婦人は詐偽信ぜべからざるもの多きの、一段を演説、せりその新婦は、原来詐偽不品行の疑ひを被ふりたる、ものなりしを、兼て知りながら、之とかへりみざりき、此講説終りたる後に、高僧二人に對して、僧官賣買の罪科、及ひ僧徒の俗人を騙欺ぜるの、罪状を論じたるを以て、大ひに僧官と爭論を起したり、オーリアスの所行常に此の如くなるを以て、一人の彼を愛せるものなしと、

忍耐患難　財貨消耗　償光陰消費

第三章　忍耐勉强

○忍耐とは、事をなすに、能艱難苦辛を、耐へ忍ぶをいふ、

○財貨の耗消せるは、猶これを償ふことを得べし、光陰の消費せしは、再び生ぜるの道なし、

○人一たびなれば、己之を百たびし、人

剛毅

成就中廢

困難愈甚

勞苦危險

勇氣顯

十たびすれば、己之を千たびす、古語

○大人と、小人との別は、特に剛毅と、剛毅ならざるとの別のみ、人一たび、志を定めば、其後あるひは、死すべし、或は成就すべし、決して、中廢すべからず、勢斯毅

○困難愈甚しければ、愈多く勞苦を為すべく、危險いよ〳〵甚しければ、愈多く勇氣を顯すべし、那比爾

○凡そ人、事業を成就するには、剛毅な

基礎

頴敏

多分

快樂

遂

資

る、心志の力を以て基礎となす、剛毅の心は、頴敏の才に比すれば、其人を成就すること、多分に居る、立志編

○忍耐は快樂の根本なり、西諺

○忍耐の心を存すれば、天下の事、何を求めてか得ざらん、何を欲してか、遂ざらん、

○剛毅の性は、以て忍耐の力を、なす所にして、忍耐の力は、即ち剛毅の力に資

勉強　榮譽　高尚　競衰　頽富貴　覬覦　社會　懶惰　勝　令聞　廣譽　結菓

りて成る、　那比爾氏

○勉強は、幸福を生むの母なり、泰西名言

○勉強して、榮譽を致さんとするは、高尚の競なり、若他人の衰頽に乘じて、己れを富貴にせんと、欲するは、覬覦心なり、その社會を毒するは、懶惰に勝ること一等なり、　麻順氏

○身を立て、道を行なひ、令聞廣譽を以て、天下後世に及ぼすは、皆勉強の結菓

英才　別名　貫穿　卓越　勤勉　功能　凡庸　質容易　絶世　豪傑

なり、　西諺

○英才といへるものは、他にあらず、勉強力の別名なり、　同上

○今日一事を記し、明日一事を記す、久しければ、自然貫穿す、　呂氏童蒙訓

○世間多く、事を成すは、卓越の才氣あるものに非ずして、勤勉の人にあり、勤勉の功能至れば、凡庸の才質といへども、容易に、絶世の豪傑たるを得べし、　西諺

福運　盲人　生涯　觀　順風　航海　隨　勉勵　衆庶　禅益　勞動　遊惰

○福運は、盲人に等しく、人を辨ぜざるが如しと、いへども、能く人の生涯を觀るに、福運は、常に勤勉をる、人の側に傍ふこと、順風の航海に、巧みなるものに、隨ふが如し、西諺

○勉勵して、衆庶を禅益をべき、勞動を為す者は、衆庶も亦これを敬し、又之を稱す、同上

○汝三十歳に至らば、必遊惰を悔ひ、勉

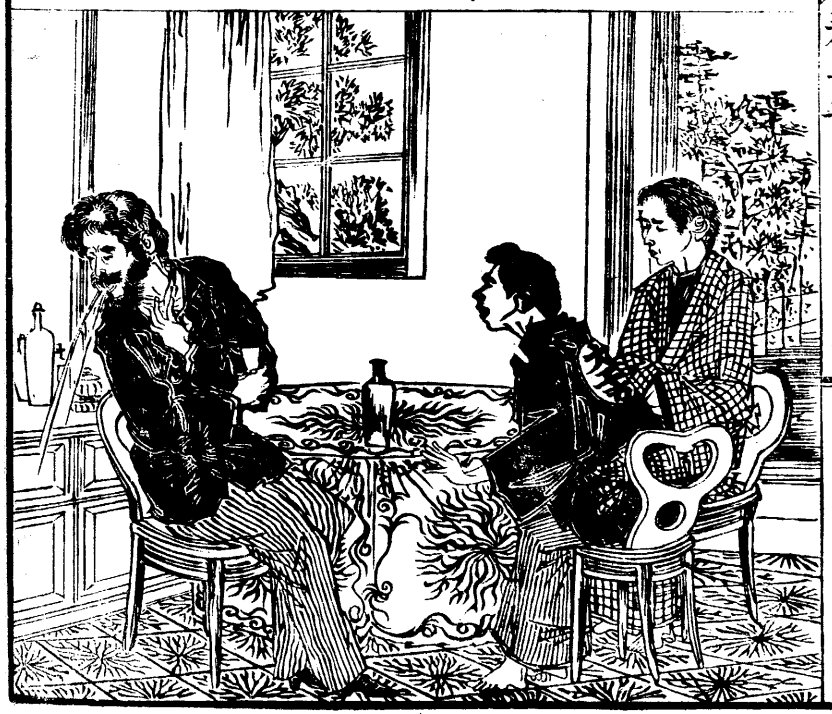
享福　悟　横濱　程近　大工　職　同港　英商　此館　麥酒　釀造　餘暇　分量

業は、享福の至大なるものたるを、悟るべし、同上

○横濱に程近き、北方村の大工職、保坂森之助、同吉蔵の兄弟は、明治九年の春頃より、同港山手なる、百二十二番の英商コツブロウの家に雇はれしが、此館は、麥酒の釀造を業とをるゆへ、兄弟共に、日々仕事の餘暇を得て、釀所に来り、その法を見るに、調藥の分量は更なり、

藥草　手續　熟　賣捌　實黙　輸入

藥草の名さへ知らぎ只其手續のみを見るばかりなり熟々思へば今内國にて麥酒の賣捌るは實に黙しけれど、外國の輸入なれ



利益　占有　殘念　製造　隙　會得　器械　腐

ば、其利益は殘らぎ、彼に占有され、如何にも殘念なれば、何卒して其法を習ひ覺へ、之を製造せば、自分のみか、内國の利益なりと、兄の言葉を弟は、實に尤と志を同ふし、是より猶更心をとゞめ、間がな隙がな、製造場に入りて、見もし聞もし、略その法を會得し、始て、稍く釀造を試みたれど器械もなく、調藥の分量さへ、明らかならざるゆへ、ことゞく、腐

敗減増舶来　平均損耗　貯蓄　水泡　歎息　改造心肝　砕美味

敗したれば、再び藥を減じ、或は増し、醸造なせども、中々舶来品には似もつかれぬ、平均一日に壹圓餘の損耗をなしけるより、最早少しの貯蓄も、盡き果て千辛萬苦も、水の泡とならんかと、兄弟頭を集めて、歎息せしが、今一度改造せんと、千々に心肝を砕きつゝ、製造なせしは、これまでになき美味をぞ、醸しければ、直に百二十二番館に持ち行きて、

可否　試　指出　壜　弛　劣　精品

我國にて醸造したる麥酒なるが、其味の可否を試みたまはれと、指出を壜を、コップに一口飲みしや否や、直に吐き出し、味の惡きのみならぞ、腐敗したりと聞て、兄弟は力を落しけるが、又も弛るむ氣を取直し、其後四五度も試み、持ち行きしが、終には、同館に醸造せる品に劣らぬ、上等の麥酒を製造し、始めて調製の分量をさとり、益々精品に至る

必竟 困難 極度 成果 磁器 粗製 純白 刻苦 椅子 碎薪 困苦

より、末は外國人の注文を受け、盛大に立行きけるも、必竟剛毅の心を以て、困難の極度を忍びたる、成果にてやあらん、昔し佛國のハリツレー氏は自國の磁器の粗製にして、純白ならざるを憂ひ、伊國のデラー氏の製せる、法に倣はんと、十八年の間、刻苦して、身代をかたむけ、日用の椅子を碎きて、薪となせしまでの、困苦をかさね、終に純白の上等

磁器 焼 恤 遇

磁器を、焼き出せしことありしが、森之助兄弟の如きは、能く其忍耐を學ぶものといふべし、

第四章 慈善

○汝他人を恤まば、人も亦汝を恤まん、汝善く他人を遇せば、人も亦善く汝を遇せん、

○時にのぞみ、相もくひ、相助くるは、世に處するの則にして、欠ぐべからざる

悲叫　感動　薄情　憫　仁恵　性命　産業　貧乏　救助　襲撃　劫掠　防護

通義なり、

○貧者の悲叫を聞きて、感動せざるものは、真に薄情といふべし、他日已ぞ悲み叫ぶことあらんとき、人これを聞きて、憫まざるべし、　勸懲雜話

○仁恵の道は、はなはだ廣しといへども、性命産業を、失はんとするもの、又貧乏なるものを救助し、惡人のために、襲撃劫掠に逢ふものを防護し、老衰重病

生計　賑恤　慰安　最大　文武兼備　戰騎　斃屈　創蒙　扶

にて、自ら生計を立る能はざるものを賑恤し、不幸に逢ふものを、慰安をする等は、其目の最大なるものなり、

○ヒリップ、シドニーは文武兼備の將なり、子ーゼルランドのジョツトヘンの戰に、騎る所の馬、矢に中て斃る、もの、二回なれども、少しも屈せず、猶力戰して他の馬に騎りかへんとするとき、遂に其身も創を蒙り、士卒に扶けられ、

退戰場渴　容易　稍麾下汲傍　羨氣色

退きたり、大凡戰場に於て、創を受けるものは、甚だ渴するものなり、ヒリップ、シドニーも、大ひに渴するれども、容易く水を得がたく、稍やくにして、麾下の士、一杯の水を汲み来りしが、傍らに同ドく、創を受けたる、一卒あり、其水を仰ぎ見て、羨やみ望む、氣色見へければ、ヒリップ、シドニー己れは飲まぎして、これを卒に與へ曰く、汝の求めは、吾よりも甚し

息絶　末期　愛惠　不朽　竹帛　慈惠　處置　沒

かるべしと言ひ終りて、息絶へたり、夫れヒリップ、シドニーの如き、末期に至るまで、愛惠を下に施こし、不朽の名を竹帛に垂る、世人慈惠の處置を尊ふの間は、其名日月と共に、沒もることなし、

訓蒙修身書第五終

明治十五年三月十七日版權免許
同　四月　出版發兌

編輯兼出版　德島縣士族　福田宇中
大阪府東區安土町四丁目
拾壹番地寄留

製本發賣所　大阪府平民　華井卯助
府下東區安土町四丁目
拾壹番地

訓蒙修身書

田村初太郎校閲
福田宇中編纂

六

72
388

大日本教育會書籍館
一八函
一架
三號
一二册

館

K110.1
184
6